

八 慕直去、慕直去

一旦思立つて足を求道の道に運ぶ。須らく勇猛専精であらなくてはならぬ。中間で道草を取るやうではならぬ。

大和田源太左衛門と云ふ武士。永々の浪人となつて、埋れ木の花咲くこともなく打ち萎れて暮してゐると、知己の肝煎で、然る邸に奉公する手懸りも出来、愈今日は殿様へお目見え仰付けられ、其上改めて召抱ると云ふ事になつた。彼は喜び勇んで、借物の熨斗目麻上下に威儀を繕ひ、邸へ赴けば、取次の若衆は對面の間に請じて「暫くお待ち下され」と茶菓煙草益などを、前に置いて立去つた。

源太左衛門、待てどもく何の沙汰もない。待ちくたびれて欠伸も出かゝる所へ、家中の子供と見えて、腕白らしい七八歳位の男の子が、窃と障子を開けて、ちよこく駆け寄り、その菓子を手攫みにして障子の蔭へ持ち行きむしやく食つて居る様子。食べてしまへば、又ちよこくと來て菓子を攫む。都合三度に及べば、源太左衛門も聊か癩である。自分が浪人して居るの空腹さに、菓子を食ひ暴したと思はるゝも残念。憎い奴め一つ嚇して遣らうと、障子の側に行つて待ち構へて居る。それとも知らないで又廊下に登音、來たな驚くなど、両手の拇指を口の兩端に突込み、食指で目の下を抑へて障子が開くや否や、「ぐわあ！」と云ひながら怖い顔をつき出せば、何ぞ圖らん、子供と思つたは、此の邸の家老職。驚くまい事か、源太左衛門よりも家老職。其の場を飛び出し殿様の御前に参り、「あの様な狂人をお抱になつても仕方がございますまい」といつたので、彼は體よく斷られてしまった。面目次第もなく這々の體であつた。

我身の勤め責任本務を忘れてはならぬ。彼がお邸に参つたのは、子供を嚇

すためではなく、菓子の番をするためでもなく、妙な顔をするためでもなく、
只管殿様に御目見えして、立身出世の緒を求むるのであつた。それに僅な
ことに入らぬ眞似をするものだから、こんな物笑の種となつて、了はねばな
らぬ事になる。南浮の人身別用なし唯此の法を聞信するにあり。吾等は唯此
法を聞いて信じて佛になるために來たのである。その根本の目的を忘れて、
枝末の世事に惑はされてはならぬ。本樹つて末行はる。